OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	(海外報告)緑の環境をたづねて
Author(s)	浅田, 正代
Citation	デザイン理論. 1989, 28, p. 103-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52611
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

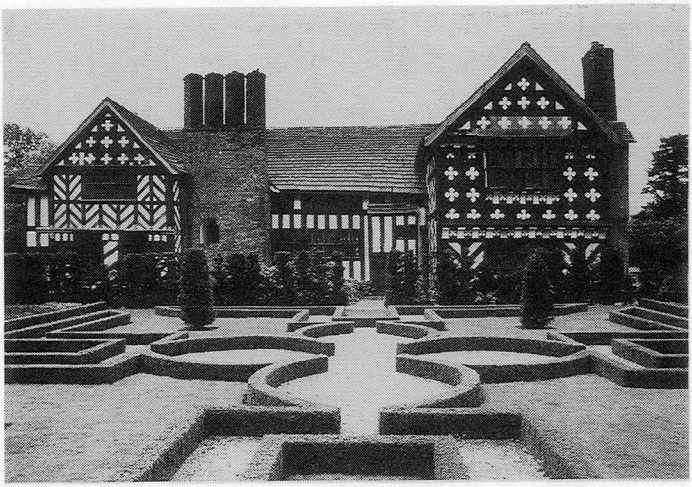
（海外報告）

緑の環境を訪ねて

—— 中世のハーフ・ティンバードとガーデン ——

浅　田　正　代

1988年5月，私はすべての拘束から離れて自由な立場で他国の香りゆたかなグリーン環境を5ケ月の予定で見てあるいた。主にロンドンを中心としたカントリーサイド，およびエディンバラ，その他である。このきっかけとなったのは，自分が永年過した大学のキャンパスに「緑のない」さみしさであった。日本の大学の環境をすべて知っているわけではないが，おしなべて日本の学園



DECORATIVE FRAMING
リイトゥルマートンホールとノットガーデン

は緑の環境づくりに消極的で，植物の成育に力がそそがれていないと思っていた。

丁度その頃，関西のある女子の名門校である英文学の教授が，大学のキャンパス内に文豪シェークスピア（1564～1616）の作品に出てくる植物の中から，約100種類を集めた「シェークスピア・ガーデン」をつくったことが公表された。人ごとではあったが教育者の一人として私は誰よりもこの報道をよろこんだように思う。本草学に秀いで，花や香草を巧みに作品に表現したシェークスピアの，内面に少しでも近づくためには，こうしたキャンパス内の香草園づくりは，教師として学生への最大の贈物になると思ったからである。

かねてオックスフォードやケンブリッジなどのコレッジのクオッド（中庭）—— 300年以上も刈りこんでいる芝生や庭園をみて歩きたいというのが私の夢であったから，このことに加えて，16世紀に花ひらいた文豪シェークスピアの生れ育った町を訪ねて，殆ど手づかずで残っている木造建築の家並や，生家の裏庭に再現されているハーブ・ガーデンなど，香り豊かな環境の視察が実現したのである。

CLOSE STUDDING FRAMING
Queens' College 1446年創立
（ケンブリッジにて）
夏休みに開放されたコレッジの中庭，テンバーの建物が全体にうまく調和している。

シンガポールをふりだしに生活の本居はロンドンにおいた。ロンドンは私にとって24年ぶりの訪問であったが，すべては初めての感で，まず交通に馴れることであった。カントリーサイドは知人の車に同伴することもあったが多くは汽車と足で訪ねた。

イギリスのカントリーは，名も知れぬ小さな駅々でも，車窓よりバスケットの美しい吊花が眺められる。家々の窓辺を飾る花も目をみはるばかり。ワイルド・フラワーはいたるところに咲きみだれ，寒い冬枯れのイギリスなど想像することもできない。この美しい自然環境のなかで，建物,特に民家は地方によって特色がはっきり分れることを識った。

イギリスで最も美しいといわれるコツワルド地方は，コツワルド・ストーンでできた蜂蜜色の美しい家並ばかりである。羊を放牧した丘陵地に，遠々と続く低い塀もコツワルド石。バスの発祥地であるBATA MUSEUMにはローマ時代のコツワルド・ストーンがいろんな形で残されていた。南西部のドーセットでは銀味を帯びた白亜の石造りの家々。ウエイルズでは緑や水色の可愛い家がドールハウスのように点在し，お伽話の指し絵をみるようだと話す人がいる。最後に訪れたエジンバラは濃いグレーの花崗岩の家が殆どで，高くそそりたつ黒いモニュメントも異様なまでに重苦しく，建造物のすべてから，スコットランド特有の重圧感を感じた。その土地特産の石の採れない地方ではレンガや木が使われるそうで，おのづからその土地の伝統を守り通すことになる。イギリスが人を惹きつけるのは，自然美を大切にしたその土地特有の美しさがあるからであろう。

シェークスピアのふるさとストラトフォード・アポン・エイボン(STRATFORD UPON AVON) はロンドンから汽車で約2時間半，かつてシェークスピアが愛した田園風景が今につづく，小さな美しい歴史の町である。現在人口2万ぐらいで，チューダー様式の民家が軒を連ねた独特のたたずまいをみせている。16～17世紀に建てられたハーフ・ティンバード (HALF TIMBERED) とい

われる半木造の家は別名ブラック・アンド・ホワイトとも呼ばれ，黒いテンバー（木材）の骨組が白壁に露出した木造建築工法である。骨組みの基本的なパターンは５つあり，名稱と特徴は次のとおりである。

① KENTISH FRAMING

ケント州の骨組みで，窓を支えるように弓型に支柱が渡る。

② MEDIEVAL FRAMING

中世の骨組み。①大きなパネルに窓をかこむようにアーチの支柱が渡る。

③ CLOSE STUDDING

垂直の柱が羅列するが，間隔の狭いもの荒いものがある。

④ SQUARE PANEL FRAMING

柱や梁が四角く大まかに組まれて，その間を埋めている壁がパネル風。

⑤ DECORATIVE FRAMING

クローバー型や半円形，失羽根模様などをうきださせたもの。

KENTISH FRAMING
Essex 地方にあるコーチェスターにあり，
現在オフィスにつかわれている。

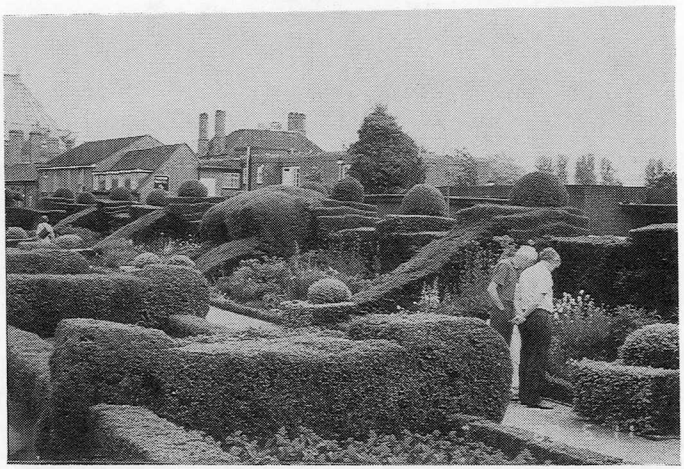
SQUARE PANEL FRAMING , MEDIEVAL FRAMING
スクエアパネルとメディバル・フレミングと組合せた 16 世紀初期の藁ぶき屋根の民家。
窓の小さいのが特徴。 （ストラトフォードにて）

CLOSE STUDDING FRAMING
シェークスピアが教育をうけたグラマースクールや救貧院からなる中世の
ハーフ・ティンバードの一郡

シェークスピアの生家は，オーク材をつかったスクエアパネル・フレミング④で，壁の色はくすんだベージュ。素朴な落着きをみせている。ハーフ・ティンバードがイギリスにどのくらい残っているかは定かでないが，これだけ多く

の半木造が一ケ所に残り，現実に使用されているというのは他にない。点在というかたちでは，ところどころで見ることができた。ケンブリッジ大学のコレッジ，また東の方では，Essex 地方のコーチェスター（Colchester）およびその近郊，西側では前記のコツワルド地方でかなり南に下ったロコック（LACOCK）で石造りの家にまじって，ポツポツみることができた。石やレンガに比べてもろい木の家が，風雪に耐え現在まで生き残り，パブやホテルになっているのは驚きであった。ロンドンにもかつてこの半木造民家はあったが，1666 年の大火で既に焼失し，その後木造建築は禁示されたそうである。

シェークスピアの生家はこじんまりと，ヘンリー・ストリートに往時の姿のまま保存されている。裏庭は 1847 年にシェークスピア生誕地信託協会が家を買いとったさい，詩人を記念してシェークスピア・ガーデンをつくった。シェークスピア劇に出てくる樹木や花，香草などが植えられ，その時，作品に登上しない植物も彩りに加えて現在に至ったということである。植物は約 125 種といわれている。



シェークスピアが晩年をすごしたニュー・プレイスにある大庭園。
チューダー朝時代の正式庭園。

この外，ガーデンは数多く，妻であるアン・ハッサウェイの初期に住んでいた農家の庭，シェークスピアの母の家，娘の嫁した家，またシェークスピアが巨額の富を得て故郷にもどり晩年をすごしたニュー・プレイスなどがある。ニュー・プレイスにはチューダー朝時代の広大な正式庭園があり，日本の造園とは対象的で特に印象に残った。

ハーフ・ティンバードの環境を支えるものは庭園のみどり，そして草花であろう。他の地では味わえない豊かな自然の香りに包まれて，古さをこえたテンバーの家並には，深い感動を受けたのである。

（元　京都女子大学）